
ハットトリックなんて呼ばせない！

野生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハットトリックなんて呼ばせない！

【Nコード】

N4561BA

【作者名】

野生

【あらすじ】

親の海外転勤について行かず、田舎の実家に帰ることを選択した静樹。

田舎に向かう途中、静樹は幼いころに「帰ってきたらお嫁さんにして」と自分に頼んだ、いつも帽子を被るのっちという少女のことを思い出す。

田舎に帰り静樹がご神木へ向かうと、タヌキの獣帽子を被った少女に猟銃を突き付けられた。彼女の名は雷道^{らいどう}乃子。静樹が幼いころに約束した女の子だった。

しかし、静樹が乃子と一緒に家に帰ってみると、そこにはさらに二人の女の子がいた。のほほんとした雰囲気であわら帽子を被る大和撫子の野永みのり。地元球団の野球帽を被るボーイッシュな野々市ツカサ。彼女たちも、自分は静樹と約束したと名乗り出る。

学校の美少女さんにと仲よくする静樹は、転校初日で学校中の敵に！しかも、校長先生までもが静樹の転校を阻止にかかる。

はたして、静樹は校長の無理難題を突破することができるのか？

そして、静樹が約束した帽子の女の子は誰なのか？

プロローグ

プロローグ

荷物的大半は引越し業者が運んで行ったおかげで、手荷物は小さなリュック一つ。都心から地方へと走る列車は、この春に上京する若者を乗せた新幹線と何度もすれ違った。

親の海外転勤。静樹は日本、しかも故郷の祖父母の家に残ることを選択した。

揺れる列車はコンクリートジャングルから脱出し、田園が広がる田舎へとんびり走行で向って行く。

旅の楽しみと言えば駅弁。故郷へ帰る楽しみからか興奮した腹は、何か食わせると12時前に大合唱。下のヒモを引くと加熱される弁当を購入し、温かいご飯に舌鼓を打ちながら、静樹は今から向う故郷のことを思い出した。

静樹は小学校1年生までは、その町で暮らしていた。無理な開発をせず、山と野と共存する町。町の中心部へ行けばそこその店はあるが、田舎と呼ぶに些かの躊躇もない。ゲーセンなんかで遊んだ記憶なんてない。いつも、野山を駆け回っていた。

「そっぴや、あの子どうしてっかな？」

子供の頃、一緒に野山を駆け回っていた女の子のことを思い出す。いつも帽子を被っていたその子とは、本当に毎日遊んでいた。今思えば、よくもまあ飽きずに同じ子とばかり遊んでいたと思う。

だから、自分が都会に転校すると知ったときは、その子は物凄く泣いた。「じぶんは長男だから、いつかちゃんとかえってくるよ」と生意気なことを言った自分。子供のくせに、あのときから自分はそんなふうに、男の子は家を継ぐのが当たり前だと思っていた。

正直、海外に付いて行かなかったのも、その辺が大きい。静樹の父親は、静樹とは正反対の破天荒な人で「実家のことは祖父母が切り盛りしてるから、俺は好き勝手するんだよ」といつも言っていた。

まあ、祖父母もそんな父の親なわけで「ああ、お前らの好きなように生きればいいさ」と言っているが、静樹はやっぱり男なら実家を継ぐべきだと思う。だから、こうして故郷に戻っているわけだ。少し話しが逸れた。そう、女の子のことだ。

自分がいつか戻ってくると約束したら、その女の子は帽子をギュッと掴み、小さな身体を振るわせて言った。

「じゃあ。じゃあ。じゃあ。帰ってきたら、のっちをおよめさんにして」

静樹は女の子のことを「のっち」と呼んでいた。そのせいか、女の子も自分のことを「のっち」と呼ぶようになった。のっちは一回だけじゃ満足できなかったのか、一度別れてもまたやってきて、何度も何度も静樹と約束した。

時間は記憶を風化させてしまう。それに静樹は昔から人の名前と顔を覚えるのがとことん苦手だった。転向前の高校だって、最後の最後までクラスの女子の名前と顔を全部覚えることが出来なかった。男子でさえ、曖昧なところがある。

のっちの顔は思い出せない。名前も、のっちと呼んでいたことしか思い出せない。

もし、帰って彼女に再会したら、自分は彼女だと分かるだろうか？ いや、それ以上に彼女は自分のことを覚えているだろうか。それに、あの約束も……

もし約束も覚えていて、彼女にその気があるのなら、静樹は約束を果たす覚悟がある。約束を守るのは、人間として、男として当たり前だ。二言は無い。例え、相手がどんな子になっても。

「……………」

二言は……ない。

ただ、可愛い子ならなおいいなあ、と思ってしまった静樹は、自分の不謹慎さに頭をガラス窓に叩きつけた。

(2)

「いよおっ！ 静樹、ようやく来たか！ 待ってたぞっ！」

「源じい、痛てえ。痛てえって」

都会ならまずあり得ない両開きの扉を開けるなり、祖父の源じいは静樹の肩をその無骨な手の平で何度も叩いて再会を喜んだ。まさに痛いほどの喜びだ。一撃一撃に骨が軋む音がする。

農作業で鍛えた力はこれほどのものか。改めて静樹は祖父を尊敬した。

「お帰り、静ちゃん。おじいちゃんたら、五時からずっと待ってたのよ」

「五時って……。綾ばあ、まさか昨日の夕方とか言わないよな」

「うっん。ちゃんと朝の五時よ。昨日のだけどね」

うふふふ、と祖母はその年齢からは考えられないほど艶のある笑みを浮かべた。さすが、まだまだホストへ遊びに行くだけのことはある。

いろんな面でまだまだ現役の祖父母に再会し、静樹はなんとなく疲れながらも「帰ってきた」気がした。

「ただいま。源じい、綾ばあ。今日からよろしく」

「応よっ！」

「こちらこそ、こんなバカなじいちゃんと綺麗なばあちゃんの所に来てくれてありがとうね」

自分のことを負い目もなく——いや、実際その通りなのだが——「綺麗」という綾ばあに、静樹は思わず苦笑する。確かに、この二人は父の親だ。間違いない。そう言う意味では、自分は母親似なのだろう。

自分に受け継がれた母方の遺伝子に感謝しつつ静樹は案内されるままに、用意された自分の部屋へと向かった。

八畳の畳部屋。段ボールが幾つか詰まれているというのに、大の

字になって眠れる。そして何より静樹が嬉しいのは、念願の畳に布団というスタイルで眠れることだ。和式万歳！

「だあああ——っ！ 我慢出来るかつ！」

静樹は押し入れに駆け寄り、きちつと畳まれた布団を引っ張り出した。目標は部屋のだ真ん中。陣地はすでに占領したっ！

白いシートが眩しい敷布団と、ふわっふわの羽毛布団で温か毛布をサンドイッチ。蕎麦がらまくら投入。静樹の聖地ここに完成。ああ、黄金比率の長方形。

準備運動OK。静樹は心を落ち着かせ、偉大なる一步を踏……

「静ちゃーん。ご神木に挨拶行つてきなさいなー」

「あ、はい。わかったー」

残念、聖地面着陸失敗。

でも、ご神木の挨拶を先延ばしにするわけにもいかない。礼儀は大切。自分の欲を優先させるなんて……

「優先させるなんて……俺には」

目の前に広がる真っ白な処女地が静樹を呼ぶ。

ほーら、ほーら。あつたかいぞー、ふわふわだぞー。

「ま、惑わされるか！」

嘘か真か、布団の声が聞こえてきた。これが噂に聞く九十九神だろつか。まあ、今さらこの家に妖怪がいた所で、静樹は驚きはしないが。

「そこで待つてろ、必ず戻ってくる！」

静樹は断腸の思いで決断を下すと、目に涙を溜めながら踵を返し、家の裏山へと向かった。

静樹の実家、深山家はその裏手にある山をまるまる所有していた。樹齢300年と噂のご神木は、その山間の中腹にある。子供の頃の足では1時間は掛かる道だが、今の静樹の足なら普通に登っても30分と経たずに着くだろう。

手つかずの自然が残る山は深い緑の匂いがした。都会にいた頃は見ることの少なかった自然の色が、静樹の眼を潤す。踏む土は足裏

を柔らかく包み込み、歩くたびに足が喜んでいる気がした。

風が吹けば若葉が擦れ、——ざわざわ、ざわざわ——とまるで波の満ち引きのような音を立てて静樹の耳を楽しませる。車の音や人の雑踏もない。無駄のない音は静樹を森の奥へと導いた。

もはや完全に道順など忘れた静樹だが、獣道がご神木までの道を教えてくれる。まるで、某有名アニメ映画のワンシーンだ。この森は、どんな不思議な冒険を初めてくれるのだろうか？

残念ながら雨傘を差したずぶ濡れお化けや、行き先自由なネコの乗り物などには逢えなかったが、静樹は迷うことなくご神木へとたどり着けた。

「はゝあ。太つとい」

大きな溜息と共に、素直な感想が口から飛び出した。

子供の頃の思い出から高校二年生になった今なら、などという思い込みは真つ向から弾き飛ばされた。幹はおそらく静樹1ダース分が手を繋いでようやく一周。木の葉が付いている部分何か、一番下の層でさえ見上げていると首が痛くなる。

こんなのを見せられれば、自分の小ささが改めてよく分かった。

ほとんど無意識のうちに、静樹が両掌を合わせる。別に何かを祈るうとか、そういうことも思ったわけじゃない。ただ、自分より遥かに大きな存在に、自然と両手のしわとしわがくつついたのだ。

「ふう」

無言の挨拶を終え、静樹が静かに息を着く。

「さて、帰るかあああつあーあれれええええ！」

突如、森の静寂を静樹の悲鳴が引き裂いた。ひっくり返る森の緑。日光をたつぷりと吸った青々しい木々の葉っぱは下に、大地の潤いをたつぷりと吸った草の瑞々しい緑が上に。

ぶらんぶらんとして、足をロープに獲られた静樹は、ご神木の近くに生えていたこれまた立派な木に宙づりになってしまった。吊り上げられた反動がまだ残っていて、かなり揺れる。それでもって、物凄く気持ち悪い。

ああ、罨に掛かった動物ってこんな気持ちなんだな〜と、静樹はどこか冷静に思った。

ガサツガサガサ

「な、今度は何だ？」

近くの藪がざわめく。そう言えば、最近この辺りで熊が出てちょつとした騒ぎらしい。

「なるほど、最近の熊は罨まで張るようになったのか」

そこまで知能があるなら、もしかしたら話しあえば分かり合えるかも……。

熊のご機嫌を取るためのお世辞を20個ほど考えていると、いよいよ藪が二つに分かれ、音の正体が顔を出した。

「え……タヌキ？」

宙づり状態の静樹が、目に飛び込んできた物体に思わず素っ頓狂な声を漏らす。藪を割って現れたのは、チャーミングな尻尾を揺らすタヌキ……なわけがなかった。

藪を割って現れたのは、タヌキの帽子——あの、狩人が被るヤツ——をダボツと目深まで被った、小柄な少女だった。

なぜ少女？　なぜタヌキ？

静樹が困惑していると、視線を持ち上げた少女と目が合った。小顔の割に大きな眼。ちっちゃな鼻と、ちっちゃな口。なんか、むしろーに撫でたくなる。変な意味じゃなくて！

「えっと、まあ、あゝ」

とりあえず何をツツコめばいいだろうか。要点整理。

この罨、君が張ったの？

なんでタヌキの帽子？

えっと、その俺に向けて構えている立派な猟銃……？

「猟銃っ！？」

今さらながら、静樹は少女が自分に向けている猟銃に声を上げた。猟銃だから猟をするための銃だ。つまり、獲物をしとめるための武器だ。でだ、この場で獲物と言えば誰だ？　ぶらんぶらーんと宙づ

りですよ俺。まさに恰好の的。

ダラダラダラと、静樹の額から大粒の汗が滴り落ちる、何、これ。俺なんかご神木を怒らせるようなことした？

いや、待て。よく考えるんだ静樹。確か銃刀法によれば18歳未満は猟銃でも許可が下りなかったはずじゃ。

「質問。それって、本物？」

「残念だけど、声はエアガン。ノコはまだ本物を持たせてもらえない」

見た目通りの可愛い声が帰ってきた。それに、持ってるって言うてもエアガンならまだ可愛いほう……

「でも、これは改造したから、熊ぐらいなら倒せる」

全然可愛くないっ！

ああ、俺ここで撃たれるんだ……

静樹は再び静かに目を閉じた。人間、どうしようもなくなったら祈るしかない。ずっと万歳していた手が、今度は合掌の形をとる。ナンマイダ〜ナンマイダ〜。

静樹が念仏を心の中で唱えていると、妙に顔のそばがこそばゆくなってきた。何か小さな風が当たるといつか、吸われてる？

恐る恐る静樹が瞼を開けてみると、自分の目のすぐ傍に先ほどの少女の唇があつた。

「んなっ！」

あまりの衝撃的光景に、宙づりにされた静樹の身体が海老反る。

「動くなっ！」

「うわ、待て。撃つなっ！」

再び銃口を静樹に突きつける少女。静樹は自然と万歳の体勢になつて硬直。

謎の少女は、再び静樹の匂いを嗅ぎ始めた。近づく少女の顔に、静樹の身体がさらに硬直する。そろそろ頭に上ってきた血が限界だというのに、出るのは冷や汗ばかりだ。ついでに言えば、少女が被るタヌキの帽子の毛が首筋辺りを撫でて、くすぐったいことこの上

ない。

入念な匂い検査を済ませた少女は、一步後ずさると、何か挑むような強い眼差しで問いかけた。

「お前……静樹、だな」

「え、あ、ああ」

自分の名を呼ばれ、静樹はうろたえながら頷く。なんで、この娘は自分の名を……。

いや、待て。

さつき。この娘、自分のことをノコって。それに、帽子……。

「もしかして、のっちゃん。なのか？」

自分の今置かれている状況すら忘れ静樹が問いかけると、少女は無言のまま、しかし感極まった表情で静樹の顔を抱き寄せた。

「待ってた。遅い、バカ」

「あ、ああ。ごめん」

感動の対面……とはほど遠いが、なかなか衝撃な再会だった。

ところで、そろそろ限界になって来たものがある。

静樹の鼻から垂れる紅い雫。女子に対して免疫が薄いから、と言うわけではない。誰だって、宙ぶりにされた状態で5分以上も経てばこうなるさ。

「の……っち。降ろしてくれ……。ヤバイ……から」

「あ、忘れてた」

悪気もなく言ったノコは、ずっとその細い手を持ち上げ引き金を引いた。特製エアガン猟銃の。

——バスンツ——とエアガンにしては強い発砲音が木霊し、同時に荒縄が——ブチ——と小気味の良い音を立てて切れる。その音に続いたのは、静樹が地面に落下する音だ。叫ぶ暇すらない。

ギリギリで身体を捻って受け身を取ったものの、静樹は全身を強かに地面に打ちつけた。

「イテェー。もうちょっと、丁寧に頼む」

身体を鍛えていたこと、ついでに地面が腐葉土で柔らかかったこ

ともあつて静樹は自力で立ち上がった。

改めて、今度は天地がノーマルな状態で静樹はノコと向かい合う。

「ひさ……」

「約束、憶えてる？」

静樹の言葉を遮ったノコは、猟銃を落とし静樹の襟元を掴んだ。

静樹よりもノコはかなり小柄で、少し背伸びをする体勢になる。自然と顔が上を向き、上目使いなうえに、小さく瑞々しい口が静樹の両目を捉えて離さない。

「約束、憶えてる？」

もう一度、ノコが静樹の問いかける。強い瞳が、すこし怯えるように震えていた。

「お嫁さんにして、って約束。だよな」

「そうっ！」

静樹の返答に、ノコは飛び上がりばかりに頷いた。

本気の眼。表情はまだ少し無表情だが、その喜びを代弁するようにタヌキの帽子の尻尾がピンと立った。

「えっと……、俺は男として約束は守る。でも、いいんだな」

「当たり前。それに、嫌だつて言っても逃がさない。また、罨作る」
なるほど、さっきの罨は逃がさないためだったのか。

なんとも背筋に寒いものが走った気がしたが、何はともあれ約束の相手が現れたのだ。

それも、可愛い子。ご神木は、確かにご利益をもたらしたみたいだ。

「じゃあ、よろしく頼む」

「ん」

ハッキリと頷くノコ。

だが、静樹は知らなかった。

ご神木のご利益は、これだけで留まらないということに。

第一章（１）

「なあ、ノコ」

「……………」

「ノコさん」

「……………」

「ノコ様」

「……………」

「のっち」

「なんだ？」

「何でおんぶなんだ？」

努めて冷静に問いかけると、ギョツと首にしがみ付いたノコは少しムスツとした顔で静樹のほつたを掴んだ。

「逃がさないため」

サイデス力……………」

まあ、ノコは小柄なのでけっして重いというわけじゃないのだが……………。女性経験の比較的乏しい静樹にしたら、なかなかハードルの高い状況だった。森で女の子を背負って歩く。しかも、その女の子は自分の嫁になると言っているのだ。意識しない方がどうかしている。

ノコは自分から話しかけようとしないので、なかなか会話が続かない。しかも、ヘタなことを聞けば、いきなり——パンツ！——と言うこともある。なんとなくノコには、そんな凄味があった。

女の子を背負って歩く獣道、か……………。あれ、前もこんなこと……………。ふと、子供の頃の光景が静樹の頭を過った。昔も、こんな風に女の子を背負って山を下りたことがあったような気がする。確か、その子は足を怪我して動けなかったんじゃないかなかったつけ？

記憶の中のその子はやはり帽子を被っていた。でも、あの時の女の子はノコみたいなタヌキ帽子じゃなくて、もっと普通の帽子じゃ

なかったっけ？

いや、ノコだって昔からこの帽子をかぶっていたわけじゃないだろう。もしかしたら、昔は普通の帽子を被っていたのかも……。いや、きっとそうだろう。

よかった、話題が見つかった。

「そう言えば、昔こうやっておぶって帰ったことがあったな。ほら、ノコが足を怪我し……」

——バスンツ——。鋭い空気の刃が静樹の頬を撫ぜ、打ち出されたBB弾が柔らかな腐葉土の地面に風穴を開けた。

さつきよりも不機嫌そうな声が静樹の耳を撫ぜる。ついでに言えば、うなじに何か冷たいものが当たっている。ついでに、その首筋に当たる先端は細く丸い。

「黙って歩け」

「はいっ！ すいませんっ！」

軍隊並みに背筋を伸ばして返事をした静樹は、もはや一言も口にすまいと心に誓った。

ようやく銃口が静樹の首筋から離れる。代わってノコの腕が静樹の首に巻き付いた。肩に乗せた小さな顎。深々と被ったタヌキの帽子の毛が、さわさわと頬をくすぐる。

横目で見ると、ノコは改めて可愛い子だった。いや、可愛いというよりは愛らしい。そんな物騒な物さえ持たなければ。

背中 of 支配権は、家に帰るまで返ってこなかった。いくら軽いとはいえ、山道を歩き続ければ静樹も疲れる。そのうえ、今日は晴れとした青空のおかげで気温も高い。もっと言えば、女の子の身体は思った以上に温かい。

結果、静樹の背中はずでに隙間がないほど汗ばんでいた。

汗臭くないのだろうか？ さすがに静樹が気にした、その時。

「あ、おーい。やっと戻ってきたなー」

太陽に向かって力強く咲くヒマワリを思わせる晴れやかな声が、静樹の耳に届いた。

「ん、誰だ？」

静樹が視線を持ち上げると、家の玄関先に誰かが腕を振って待っていた。春先には少し早いタンクトップに色の濃いジーンズ。「酒」と書かれた前掛け。そして頭には地元球団の野球帽。遠目には野球少年に見えるが、さっきの声と、タンクトップを押し上げるものを見れば、間違いなく女の子だ。

でも、誰？

自分に向って手を振っているんだから、子供の頃の友達だろう。

でも、残念ながら名前と顔が思い出せない。失礼だと自分でも分かっているが、静樹は病的に人の顔と名前が覚えられないのだ。

とはいえ、ここにきて気付かないふりは出来ない。

静樹は覚悟を決めて、曖昧な笑みを浮かべながら手を振り返した。ここまでできたら、秘技を使うしかない。

すなわち、会話の流れで相手が誰か突きとめる！

「あ、ノコもいるー。おい、ノコー」

「ツカサ、五月蠅い」

ナイス、ノコ。情報ゲット。名前はツカサと言っらしい。残念、

記憶に該当者ゼロ。

攻められては不利。静樹は自ら声を掛ける手段に出た。

「よお、久しぶりだな」

「ほんと、久しぶりじゃんねー。えっと、小1のときからだから

……9年ぶりかー」

指折り数えるツカサ。小1、つまり小学校の時の同級生か。

静樹はすぐさま思い出せる限りの小学校の時の同級生を思い出した。だが、悲しきかな、小学校の時から人の顔と名前は覚えられなかったらしい。該当者、ゼロ。

「静樹は、今、部活何かやってんの？」

「え、俺か？ 前の高校では弓道やってたけど。えっと、そっちは？」

「あたし？ あはははは、なに言ってるの？ あたしがやるって言

「つたら、野球に決ってんじゃん」

——ブンツ——とツカサがバットを振る真似をする。そのフォームは様になっていて、素振りにも関わらず凄い音がした。

野球……野球……。ダメだ、思い出せねえ。

後は何だ？ 家族構成？ あだ名？ 生年月日？

どれも、あまり期待できそうにない。

そんな静樹に、ツカサは何か期待に満ちた視線を向けてくる。

ヤバいつ。何か話さないと。

「えっと、ツカサは……」

「あはははは。ツカサなんて呼ばないでよ、気恥ずかしい。昔みたいに呼べばいいじゃん？」

「え？ 昔みたいにつて……？」

「何とぼけてんの。照れない照れない。昔と同じ『のっち』でいいからさ」

「ふえ？」

ツカサが何を言っているか、静樹は一瞬理解できなかった。

『のっち』？ ええつ、『のっち』？

「ちよつと待て。俺、昔本当に『のっち』なんて読んだのか？

てか、ツカサだろ、名前。どこにも『の』なんて入って」

「もう、子供の頃から会ってなかったからって、忘れての？ 私の

苗字。『野々市』でしょ」

「あいい？」

静樹の表情が固まった。野々市、ののいち……のっち。あー、はいはい。そうですね。のっちですね。

え、じゃあ、まさか……。

不吉と言つか、幸せと言つか。いろんな感情が入り混じった予感が静樹の脳裏を掛ける。

そんな静樹の内心など露知らず、ツカサはこちらまで気持ちよくなるような晴れ晴れとした表情で言った。

「んじゃ、静樹。帰って来たなら、約束通りあたしをお嫁さんにし

てよね」

あ、そうだな。お約束だよな。

ツカサがその言葉を放った途端、静樹の首筋で——ジャキン——と不吉な音がした。いや、こっちのお約束はいらないんですけど。お代わりしてませんかから。

「静樹」

「はいっ！」

かつてないほど、自分の名前が冷たく感じた。いや、でも待て。おかしいぞ。よく考えろ。

静樹がかつて遊んでいた帽子の女の子は一人だ。のっちと呼んだ子も一人だ。そして、『お嫁さんにすると』約束した子も一人だ。それが何で二人も名乗り出てくる。

よく考えろ、深山静樹。こんなことがあるのか？ 自分は誰よりも正しく、男らしく。そうやって生きてきただろ。品行方正、剛毅果斷、日本男児。それが、お前の子供の頃からの目標だろ。

そんな静樹が、そんな静樹が、子供の頃とは言え別々の女の子から、こんな約束をすると思うか。いや、思うまい。きっと、先に約束してきた子を優先するはずだ。そうに違いない。

じゃあ、何で二人も現れた。考えられる事は一つ。どちらかが静樹と誰か別の人間を勘違いしているんだ。

早く誤解を解き、真相を説明せねば。

「ノコ。まずは話しあ……」

「いいわけ、聞きたくない」

緊急事態。脂肪フラグ……じゃなかった、死亡フラグ発生。

首筋から後頭部に銃口が移動。え、予想以上にノコってデンジャラス？ 見た目の可愛さに惑わされた。ノコは本物の狩人だ。

「とと、そんなの向けたら危ないっしょ。ノコ」

「ふあいあつ。こらっ、ツカサ。止める」

「やめてほしかったら、その物騒な物を放すんだ」

「なふいふお。ふひゃー！」

ノコの口からなんとも妙な声が漏れた。同時に、ノコの猟銃が地面に落下。とりあえず、死亡フラグは回避したらしい。しかし、ツカサは一体どうやってノコを止めたんだ？

静樹が首を回して視線を背後に向けると、ツカサがノコに向って手を伸ばしているのが見えた。場所からして、後頭部辺り。髪でも掴んでいるのだろうか？

いや、違った。ツカサが握っているのは、ノコの被るタヌキの帽子の尻尾だ。

「あ、静樹。ノコはこうやって尻尾を掴んだら大人しくなるから、憶えてた方がいいよ」

「こら、ふあらずな」

ノコが涙目……というよりは、顔を弛緩させながらツカサに抗議の視線を送る。しかし、ツカサが「えいつ」とタヌキの尻尾を引っ張った途端、ノコは「みひゃっ！」と高い声と共に、静樹の背中からずり落ちた。

「すげえ、あんだけ言っても離れなかったのに」

「ノコの本体はあの帽子だからね」

「そ、そんなわけ、あるかつ！」

地面に落ちたノコは最後の力を振り絞ってツカサの手を振り払うと、猟銃を掴み取りながら大きく飛び退いた。

「あはははは、ほんと可愛いよね。ノコって」

「笑うなっ！」

鋭い声で威嚇しながら、ノコが猟銃を構える。しかし、その銃口は定まらない。ふるふると涙目で震える姿は、まるで水を被ったネコのようだ。

と、ともかく窮地は脱したらしい。

大きく息をついた静樹は、ノコよりも話しが通じそうなツカサと話し合うことにした。

(2)

「なあ、ツカサ」

「のっちだよ」

「のっちはノコだっ！」

小首を傾げて催促するツカサに、ノコがすかさず噛みつく。

ノコの言葉に、ツカサはキョトンとした表情を浮かべて静樹を見た。

「えっと、静樹。ということ？」

「いや、俺もそれが知りたいんだ」

頭を掻く静樹は覚悟を決めた。ノコに射殺される危険性もあるが、いずれバレることだ。静樹は二人に今までの経緯、つまりノコも自分を「のっち」と名乗っていること、そして、自分が誰を「のっち」と呼んでいたか思い出せないことを正直に説明した。

「ふーん、面白いじゃん。それっ！」

「地獄落ちろ」

何とも対照的な答えが返ってきた。いや、地獄に落ちるも酷いけど、面白いで済みますか。この状況を。

ツカサはまたまた猟銃を構えるノコをタヌキの尻尾を掴んで黙らせると、自分の野球帽のつばを指先で——ピンツ——と弾きながら声を弾ませた。

「二人の女の子に迫られるなんて男の夢じゃん。がんばれ、男の子」

「頑張れっ。そんなんでいいのかよ」

「ん？　なんで？　ギヤルゲーとかそんなのばっかでしょ」

「ギヤルゲーって……。やったことあるのか？」

「うん。さすがにないけど、部活の男子達が毎日そんなことばっか話してるからね」

あはははは、と白い歯を見せながらツカサが軽快に笑う。なるほど、体育会系に囲まれてたからこういうさばさばした性格なのか。

静樹が妙に納得していると、不意にツカサがぐいっと顔を寄せてきた。「んなつ！」と驚く静樹に、ツカサは笑いながら女の子らしい細い指を立てて、静樹の唇に沿える。

「んでさ、静樹。もう、初体験とかはしてきたの!？」

「な、ななな。何言ってるんだっ!」

「あつはー。してないんだ。でも、キスぐらいはしてきたのよね」
「う……………」

あっけらかんと言うツカサに、静樹の顔が引きつる。

「あれ、そっちもまだだった?」

「わ、悪いかよ」

「悪くは無いけど意外だなんて。都会の方はめっちゃハードル低いって、いつも男子が騒いでるからさ」

「お、俺はそんな軽い気持ちでなんてできねえよ。付き合う相手はしっかり考えるし、付き合ったからには責任を持つ。それが、男として当然だろ」

ぐっと身体を構えて答える静樹に、ツカサは一瞬キョトンとする
と、すぐに大口を開けて笑いだした。

「あはははは、ははは、あひひひ。ふふふ。あははははは」

「な、何が可笑しいんだよ」

「いや、だつてさ。男として当然で…………、頭の堅いとこ、そのままだね、静樹って」

「お、俺はだなっ!」

あまりに爽快に笑われ、さすがの静樹もムツとした表情を浮かべる。これは、一言ガツンと言ってやらねば。

そう思った矢先、目元の涙を拭ったツカサが、どこか嬉しそうな顔で頷いた。

「うん、やつぱり静樹は静樹のまんまだ。それに、あたしは好きだよ。そういう、一本筋が通ったの」

一点の曇りもない笑顔を振りまかれ、静樹は言葉を失った。
そんな静樹の袖が、ぐいっと引つ張られる。ノコだ。

「当り前だ。ノコの静樹だからな」

「まだ、ノコのって決ってないっしょ。……ほんとと言うとさ、もし静樹が軟弱なヤツになって帰ってきたら、捻り潰そうかと思ってたんだよね。アレを」

ぐつと、ツカサが笑いながら拳を握る。

アレってなんだ？ とは聞けなかった。

「でもさ、やっぱり静樹は静樹だ。だから……」

ツカサは好戦的な笑みを湛え、ビシッとノコを指差した。

「静樹は、やっぱりあたしがもらう」

一切の気負いなく言い切ったツカサと、静樹の袖を握るノコの間で激しい火花が散る。もちろん、女性の顔と名前は特に覚えられないほど女性との関わりが薄かった静樹が、こんな修羅場を乗り越える術を持っているはずもない。

静樹は初めて知った。女性の修羅場って本当に怖い！

だからだと滝のように流れる汗。過呼吸まであと一步。

「静ちゃーん。帰って来たのー？」

そんなとき、深山家の玄関戸がゆっくりと横に流れ、中から綾ばあが現れた。綾ばあの優しい垂れ目が、ゆっくりと三人を捉える。

「まあ」

綾ばあは、上品に口元に手を当てると、乙女のように微笑んだ。

「静ちゃん、やるわね。帰ってきてもう二人の女の子を手籠めにするなんて」

「手籠めって言い方やめてくれ。つーか、普通こんな状況なら非難されるとこじゃないの？」

「何言ってるの、静ちゃん。浮気は男の甲斐性でしょ」

ダメだ、綾ばあに貞操観念を聞いても全て受け入れられるだけだ。「えつと、野々市酒屋さんのツカサちゃんに、雷道さんの所のノコちゃんね。こんにちは」

「毎度ごひいきにどうも」

「（ぺこり）」

綾ばあが頭を下げると、ツカサとノコがそれに続く。どうやら、三人は顔見知りらしい。まあ、対して大くない町だ。町内会のほとんが親戚みたいなものなのだろう。

なんとなく取り残された寂しさを静樹が感じていると、綾ばあが「そうだわ」と両手を打ち合わせた。

「ツカサちゃん、ノコちゃん。ちよつと、静ちゃんのこと案内してきてくれないかしら。まあたいてい変わってないまちだけど。ね、お願い」

「いいっすよ」

「（こくり）」

二つ返事で応じるツカサとノコ。静樹はさすがに一言抗議しようかと思っただけ……やめた。

野球帽のつばの下で少年のような笑みを浮かべるツカサ。口を横一文字に引き結びながらタヌキ帽子をぐつと引き下げ、緩んだ目元を隠すノコ。こんな二人の申し出を断っては男がすたる。

「ちよつと財布取ってくる」

自分の頬が熱くなるのを感じた静樹は、足早に玄関へと駆け込んだ。女の子の笑顔を見ることが、こんなにも恥ずかしい気持ちになるなんて。思春期を過ぎた静樹にとって初めての経験だ。

けれど、恥ずかしがってばかりもいられない。男たるもの威風堂々と、常にどっしりと構えなくては。

「けど、まさか二人も現れるなんて。って、どっちが『のっち』なんだ」

静樹が約束した女の子は一人。記憶があいまい過ぎて、もはや顔なんて思い出せない。唯一思い出せるのは、彼女が帽子を被っていたこと。でも、それがどんな帽子だったかまでは思い出せない。

「あああああ。俺の馬鹿っ。いい加減、人の名前と顔を覚えろよ」
自分に叱責を浴びせながら、静樹が新しい自分の部屋の襖を開ける。詰まれた段ボール。勉強机。敷布団。敷布団で眠る女の……。
「んなっ！」

思わず叫んだ静樹が、その場から後ずさる

出かける時には空だった敷布団は今やこんもりと盛り上がり、スヤスヤと見知らぬ女の子が寝息を立てて潜り込んでいた。

「ちよちよつと、何やってんだよ」

「ん？ ふあゝ……、誰ですか？」

「それはこっちのセリフだ。君は誰だ？」

のっそりと身体を起こした女の子は、ねむけ眼を擦りながら枕元の眼鏡を引き寄せた。清楚可憐。腰元まで伸びる、しつとりと濡れているような黒髪。古き良き日本女子を思い起こす顔つきに、静樹が思わずドキツとする。

ノコやツカサも十分に可愛い女の子だが、顔の好みだけで言えば、眼の前の子は静樹のと真ん中ストライクだった。眼鏡を掛ける仕草にさえ品がある。

完璧に硬直する静樹。

対して、謎の大和撫子は眼鏡を掛けた途端、鋭い視線を静樹に投げかけた。

「女性の寝床にいきなり現れるなんて失礼じゃないですか」

「失礼も何も、ここは俺の部屋だ」

「俺の……部屋？」

静樹の言葉を反復する彼女の顔色が見るうちに紅潮する。震える手は布団のシーツを掴むと、ぐしゃぐしゃに握り締めた。

先ほどの凜とした態度が嘘のように動揺する少女。

そのあまりの変わりように静樹が困惑していると、少女はその細い喉で一度つばを飲みながら、布団を握る手以上に震える声で静樹に問いかけた。

「ま、まさか。静樹なの？」

「あ、ああ。確かに、俺は静樹だけど」

「~~~~っ！」

静樹が頷いた途端、少女は沸騰せんばかりに顔を真っ赤にし、握っていた布団をたくしあげた。

布団に潜り込んだ少女から、切羽詰まった悲鳴が上がる。

「で、出たってってください。見ないでっ！」

「わ、悪いっ！」

反射的に誤った静樹は、慌てて部屋の襖を閉めた。途端、部屋の中からドタドタドタと慌ただしい音が聞こえてくる。ときどき——ゴシャン——と何かが壊れる音までしてきた。中は一体どうなってるんだ？

てか、誰っ？ 今の子？

いろんな意味でハラハラしていると、静かになった部屋の襖がほんの数センチだけ開かれ、しずしずと先ほどの女の子が顔を覗かせた。

「あ、あ、あ、あの。別に、私は怪しいものではっ！」

「わかったわかった。分かったから、少し落ち着け」

震える少女の振動が襖に伝達し、——カタカタカタ——と物凄い音を立てる。

「だから、落ち着こう。な。ほら、深呼吸」

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

「いや、その呼吸法はやばいから。ほら、俺と一緒に。スー……ハ……ほら」

「スー……ハー。スー……ハー……」

「落ち着いたか？」

「あ、はい。重ね重ね、恥ずかしい姿を……」

恥じらいに手をもじもじさせる少女に、静樹の心臓が再び跳ねる。自分を落ち着かせようと咳払いを一つした静樹は、「それで」と半分だけ覗く少女に問いかけた。

「君は誰なんだ？ なんで、俺の部屋に？」

「え……」

目眩でもするようによろけた少女の顔が憂いに翳る。

「私のこと、忘れてしまったのですか」

胸に握った手を当て、すがりつくように訊ねる少女。

そんな彼女に、静樹は嘘を付くことは出来なかった。

「悪い。子供の時のことけっこう忘れてて。それに俺、人の名前と顔を覚えるのがとことん苦手なんだよ。本当に悪い」

真摯に頭を下げる静樹に、少女は言葉が見つからず口を引き結ぶ。そのとき、頭を下げた静樹の眼に、あるものが飛び込んできた。

少女の足元にそっと添えられた麦わら帽子。

引越しの荷物に麦わら帽子は無かったはず。

静樹は現実主義者だが、直感や流れといったものも信じる。今までの流れ、そして帽子。

静樹は大きく唾を飲み込みながら、もたげていた首を持ち上げた。

「なあ。名前、教えてくれるか？」

「私の名前は野永みのり。昔、静樹は私のことを……」

「のっち、って呼んでたのか？」

「はいっ！」

みのりの顔から翳りが引き、代わりに大輪の笑顔が浮かぶ。

はっはっは、綺麗な笑顔だな。

静樹は晴れやかな微笑みを浮かべると、そのまま床にぶっ倒れた。

「キヤーツ！ 静樹、どうしたの？ 静樹っ」

慌てて襖を押し開き、静樹の肩を揺さぶるみのり。その叫び声を聞き付け、ツカサ、ノコ、綾ばあ、源じいが大集合。あっという間にその場はてんやわんや。

いろんな声が飛び交う廊下で、静樹は虚ろに天井を見上げながら、心の中で叫んだ。

俺が約束した「のっち」は、誰なんだーっ！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4561ba/>

ハットトリックなんて呼ばせない！

2012年1月14日19時50分発行